

# シングル介護の危機的状況および危機促進・回避要因の検討 —有効的な支援に向けて—

保健医療学専攻・先進的ケア・ネットワーク開発研究分野・ケアマネジメント学領域  
学籍番号：13S3021 氏名：川村真由美  
研究指導員：竹内孝仁 副研究指導教員：井上善行

キーワード：シングル介護 危機理論 危機回避要因 居宅介護支援 高齢者虐待

## I. 研究の背景と目的

シングル介護とは、シングルと呼ばれる独身者（未婚・離婚・死別した者）が、親族(高齢)を介護することをいう。成人期のある女優が、それまで介護をしてきた母を残して父の墓前で自殺をするという痛ましい事件から、2008年の報道番組で使われ始めた言葉である。

介護殺人は過去 17 年間で少なくとも 672 件起っており、息子が親を殺したケースが 32.9%、夫が妻を殺したケースが 33.6%である<sup>1)</sup>。また厚生労働省の調査によると高齢者の虐待件数は、虐待防止法施行(H18)後も、平成 18 年から 25 年度までで約 25%増加しており、世帯では「未婚の子と同居」が 32.8%で最も多く、虐待者では息子が 40.7%と最多であった<sup>2)</sup>。

これまでに、介護者の危機的状況に対して「介護負担」「認知症」「うつ」等に関連する研究がおこなわれてきたが、支援拒否や暴言等の支援困難例はもとより、献身的に介護を続けてきた介護者が何故、親の虐待や殺人に至ったのか、特にシングル介護者を対象とした研究はいまだ充分とはいえない。今後も、少子高齢化、非婚率の上昇、単身世帯の増加や入院期間の短縮化等、シングル介護形態の増加が予測されており<sup>3)</sup>、早急な対応が求められているといえる。

そこで本研究では、危機理論や危機モデルを理論的背景とした対象理解に焦点を当て、シングル介護者の危機的状況および危機促進・回避要因について検討し、有効的な支援に向けて示唆を得ることを目的とした。

## II. 用語の定義

危機：経験で克服不能な事態に直面したときに生じる心理的状況とする(Gerald Caplan.1968)。

## III. 研究方法

### 1. 研究デザイン：Mixed Research Design

(調査 1:質的統合法, 調査 2:事例検討・自然言語分析法, 調査 3:量的研究法)。

2. 研究対象者：成人～壮年期で、65 歳以上の親をシングル介護中の、研究協力への同意を得られた者。

### 3. 方法

調査 1 では、現在日々介護危機を乗り越えているシングル介護者の現状と危機要因について、インタビューを基に質的統合法を用い、コード化した逐語録の統合・概念化を通してサブカテゴリー、カテゴリーを抽出した。これらの関連性を、経時的視点、および危機促進・回避要因の視点で検討、構造化し図に表した。分析過程で、研究専門家のスーパーバイズを受け、分析の妥当性や信頼性の確保に努めた。

調査 2 では、1989 年～2015 年に実際に起きた介護事件（殺人、心中、虐待および未遂）の裁判例 302 件より抽出した事例検討および各判決文について、同義語の統一・置換(例：ひとつ・一つ)、分析対象外の専門用語の削除(例：刑法〇条等)などの調整後、テキストマイニングによる自然言語分析を行い、事件発生の背景やシングル介護者の危機促進要因・危機回避要因について検討した。

調査 3 では、調査 1・2 の要因および先行研究を基に、介護危機スケール(案)49 項目を作成し、量的研究(アンケート調査)によって、その信頼性や妥当性を尺度に準じる形で検討した。

総考察として調査 1～3 の結果を統合した。

## IV. 倫理上の配慮

本研究は国際医療福祉大学倫理委員会の承認を得ている。承認番号 14-Ig-78

## V. 結果

調査1：女性8名男性3名のインタビュー逐語録より、カテゴリ6、サブカテゴリ17が抽出された。構造化のプロセスで、危機促進要因として、カテゴリ【介護前の自分中心の生活】、【介護初期のパニック】【日々迫りくる課題】とその下位概念である、サブカテゴリ1.確立されていた自由なライフスタイル、2.非干渉的家族関係、3.介護に対する希薄なイメージ、4.アクシデントとパニック、5.親の変化と戸惑い、6.生活リズム破たんのおそれ、7.人の世話をする大変さ、8.自分しかいない、9.介護上のジレンマが、危機回避要因として【サポートの活用と試行錯誤】、【介護意識の変化】、【生活の再構築】とそのサブカテゴリが位置づけられた。

調査2：シングル介護者の介護殺人事件8件を分析対象事例とした結果、内的要因として、①親子の依存関係、②疾患や症状への知識不足、③介護に対する高負担感、④自分の世界に侵入される恐怖/孤立・孤独、⑤自己効力感の低下、⑥日常生活援助の経験不足等がみられた。またテキストマイニングでは「認知症」「借金」「息子」など先行研究を支持するキーワードが抽出された。

調査3：アンケート配布数約300通に対し49件の回答(回答率12.3%)であった。被介護者の平均年齢は83.9歳、要介護度4と5で約6割に達していた。シングル介護者全体の約24%は無職で、その内介護離職は約8割であった。また全体の71%が「もう介護を続けていけない」と思ったことがあると答え。介護負担感と1%水準で有意差があったのは、ADLや認知症の他、「自分以外に安心して任せられないこと」「困難や問題に対する対処困難感」等であった。

更に調査1・2を統合して得られた危機要因を基本的な概念とする既存尺度より下位項目を収集し、全46項目のSingle Carer Crisis Scale (シングル介護者の危機尺度：以下SCCSとする)を作成。『介護負担傾向』『自尊傾向』『対処能力保持傾向』『依存傾向』『うつ傾向』『自己犠牲傾向』『孤独傾向』『自己防衛傾向』の8因子が得られ、項目全体のCronbachの信頼係数は.776であった。

## VI. 総考察

1. 本研究の特徴は、シングル介護者に焦点を当て、危機を乗り越えて来ている者、実際に事件に至った者、更に現在介護サービスが入っていない介護者も含めて多角的にアプローチを行った点にある。
2. シングル介護者の危機促進に大きく影響した内的要因として、①親子の依存関係、②疾患や症状への知識不足、③介護に対する高負担感、④自分の世界に侵入される恐怖/孤立・孤独、⑤自己効力感の低下、⑥日常生活援助の経験不足(手の抜き加減が分からないを含む)が、外的要因として①トリガーとなるアクシデント、②健康な成人の同居という条件が、適切なアセスメントや対象者のニーズ把握に繋がらなかった点、③利用者が必要な時に安心して預けられるところがなかったという制度や施設の問題、④同居している子(特に息子)が親の介護に当たる現状、⑤適切な就労の機会の不足が示唆された。先行研究にある「介護期間の長さ」や「要介護度」よりも、介護の始まりや親の入退院、症状悪化などトリガーとなるアクシデント後に危機が増大することが示唆された。
3. SCCSの8因子は、調査1・2の危機構成概念を支持した。
4. シングル介護への有効的な支援には、介護者の発達段階や危機的心理状況を理解し、乗り越えるべき課題は何かを具体的に認識し対処能力を高められる視点が重要であり、支援者自身の成人男女の同居＝介護者という前提を改め、適切なアセスメントを行うことによって、シングル介護者の危機回避につながることを示唆された。
5. シングル介護における介護殺人や虐待の減少には、退院時(介護前からの)の情報提供、柔軟で速やかな入所、介護離職の防止や経済支援などの社会的支援・サポートシステムが不可欠である。

## VII. 研究の限界と今後の課題

今回の調査では、研究対象者数が制限され、非常に限定された結果となった。今後、調査対象数を増やし、危機促進要因・回避要因や効果的支援について検証してゆく必要がある。

### 引用文献

- 1) 湯原悦子.介護殺人の現場から見出せる介護者支援の課題. 日本福祉大学社会福祉論集.2011,第125号:41-43
- 2) 厚生労働省.高齢者虐待の防止,高齢者の養護者に対する支援等に関する法律 2005.  
<http://law.e-gov.go.jp/htmldata/H17/H17HO124.html2015/10/1> 閲覧